どぶ川にアユが来た

街

知多

「武豊エコクラブ」浄化活動の輪

どぶ川化して、これまで一度も捕獲の記録がなかった武豊町の堀川で、アユが見つかった。14～17㌢の計8匹。60歳を超えたメンバーが中心の環境保護団体「武豊エコクラブ」の水質浄化活動が実を結び、「見つかるわけがない」という常識をひっくり返した。（浅井直）

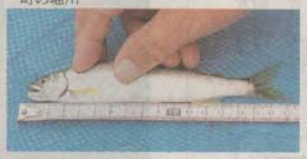
「どうだい？」「いるかな？」。網をのぞき込む心配そうな顔が並ぶ。網が絞られて水面に近くなると、一瞬の間を置いて、大きな声が飛び交った。「いる、いる。7匹、いや8匹もいる」。あとはお祭り騒ぎだ。これまで、「絶対にいない」と言われてきた清流魚のアユが、目の前で勢いよく跳ねていた。

武豊町の中心市街地の南沿いを巡って、JR武豊駅近くから衣浦港へ注ぐ堀川。かつては、ペットボトルや空き缶、さらには自転車までが投げ込まれ、まるでごみ捨て場だった。上流は下水道が未整備で、生活排水などがそのまま流れ込み、異臭もした。

見かねた住民たちが、ボランティア団体の「明るい社会づくり運動武豊」をつくって、ごみ拾いなど川の清掃に乗りだしたのは6年ほど前だった。

上流の網に向かってアユを追い上げるクラブ員たち

堀川で捕獲されたアユ＝いずれも武豊町の堀川



ヘドロ退治 団子7000個が効果

当時からのメンバーは「川から自転車が30台も見つかった」という。しかし、ヘドロなどはそのままだった。それが、昨年10月にわずか5人で発足した「武豊エコクラブ」の登場で、劇的に変わってきた。

水質浄化に効果的という有用微生物群（EM菌）を混ぜた団子を定期的に川に投入する。「すると、次第に川底の砂地が見えるようになってきた」と、同クラブ会長で自然観察指導員の鈴木樹雄さん(67)。「川が毎日変わっていく。こんなに面白いことはない」。好きだった旅行は一切やめ、仲間づくりと団子づくりにのめり込んだ。

「昨年は12月30日の午後8時まで、毎日30軒回って説得した」。狙うのは定年退職した60歳代。「ほとんどが会社人間で、地元には話し相手すらいないから、相手を求めて名古屋まで出るという。それなら手伝ってよ、と。一度、面白さを体験したら、あとはその人からの口コミ」。あっという間にメンバーは50人に膨れあがった。

夢も膨らんだ。「アユがのぼる川に」。鈴木さんが中学校時代の恩師で、知多半島の川の魚類調査をするなど淡水魚に詳しい原穣さん(79)に話すと、「たわけ、あんなところに来るわけない」と一喝されたのも、「刺激になった」。地元の子ども会や衣浦小学校にも協力を求め、これまでに約7千個の団子を投入したという。

アユの発見情報が聞かれるようになったのは、7月下旬からだ。川遊びに来ていた親子連れがアユを捕まえて写真に撮った。クラブメンバーの川合妙子さんも、8月ごろから散歩コースの橋の上から、毎日のようにアユが群れ泳いでいるのを見るようになった。

今月16日、「アユ捕獲」の連絡で駆けつけた原さん。バケツの中をのぞき込むなり、「うーん、アユに間違いない」。周りを、鈴木さんらクラブ員の笑顔が包んだ。

アユを入れたクーラーボックスを前に記念撮影したメンバーは「息の長い運動になると思うが、次はホタルが飛び交うようにしたい」。